

災害、考えて備えよう

能登半島地震1カ月 日本防災士会県支部に聞く

元日の列島を揺るがした能登半島地震から1カ月。この間、東日本大震災の被災地岩手でも、備えを固める必要を改めて感じた人は多いはずだ。「津波てんでんこ」の徹底や非常持ち出し品の点検は、もちろん大事だ。しかし定説を厳守し、リスト通りの品をそろえればそれで良いのか。安心してはいないか。対策の実効性を高めるヒントを日本防災士会県支部の清水上裕支部長(71)、荒屋敷武則副支部長(67)に聞いた。鍵を握るのは、頭。2人は「生き延びるため、考えて備えよう」と繰り返し訴える。

能登半島地震は激しい揺れと液状化で多くの家屋が瞬時に損壊し、地震発生直後に津波が襲来した地域もあった。揺れのさなかに家がつぶれ逃げようと玄関を出た時には既に海岸に津波が迫るといふ極めて困難な事態だ。初動あるいは初動以前の平時の備えが問われる災害だった。

清水上支部長(以下敬称略) 多くの被災家屋で1階はつぶれたが、2階は比較的壊れずに残った。地震も水害のように上階への垂直避難が有効ではないか。特に数分で津波が来る今回のようなケースでは、所によつて高台への水平避難が間に合わないことも想定される。(避難場所に向かうのが基本だが) 瞬時に家屋を倒壊させる強震と直後に来る津波の双方に対処するため、垂直避難もうまく取り入れるべきだ。

荒屋敷副支部長(同) 今回は夕方方の地震だったが、深夜帯に発生す



安否札を掲げる清水上裕支部長

る可能性を考えると、つぶれにくい2階に寝室を置く方が良いだろう。能登の被災地では、さびには強いが重いかわら屋根を乗せた古い木造家屋が目立った。現在の耐震基準を満たしていない家も相当あっただろう。重く古い建物は地震に弱い。こうした地域は本県にも全国にもまだまだある。耐震補強が望ましいが、多額の費用をかけられないのも実情。自宅のある一角だけを柱や壁で補強し、シェルター化するのも手だ。1層分あれば十分。家族がそこに集まればとにかく圧死は避けられる。

訓練の実効性

東北大災害科学国際研究所の推計では能登半島地震の発生直後、石川県内4市町の市街地周辺で、標高10m以上での人流が急増した。大津波警報の発表直後から人流が増え、反対に同10m未満域では急減した。

清水上 住民の多くは、発生直後にきちんと避難したのだらう。能登地方では近年、(昨年5月に震度6強が発生するなど)地震活動が活発化しており、備える意識を高めていたとみられる。防災訓練の重要性を改めて感じる。

荒屋敷 訓練の実効性を高めたい。東日本大震災から時がたち、漫然と訓練を行うケースが目立つ。例えば学校。校庭に整列し「全員避難完了。異常なし」とやっている。予定調和で滞りなく終える訓練では意味

が薄れる。課題発見型であるべきだ。子どもたちを過度に不安にさせてはならないが、訓練では想定外のトラブル、突発の事態に困惑することこそ意味がある。課題を見つけ、対応を考え、次の訓練で検証するサイクルを何度も回すことだ。そもそも訓練は、防災の日や3月11日周辺にだけ行うべきものではない。災害は猛暑の夏にも大雪の冬にも起き、登校途中や遠足の最中にだって発生する。それぞれ直面する問題は異なる。訓練のバリエーションがほしい。

いざ災害が起きれば、先生も役所や消防の職員さえも、すぐには助けにこない。われわれ住民と同様に被災するからだ。来ないのは怠慢ではなく、それが普通だ。発生直後の公助はないものと心得て、住民自ら避難所を開設し当座を生き抜く覚悟と準備が必要だ。例えば避難所が学校なら鍵や物資倉庫、配電盤やボイラー、特設公衆電話はどこにあるのか。そのレベルから情報共有し、具体的に対処する仕組みをつくる。よく考え、イメージを膨らませながら形にしていこう。

清水上 地域も同じだ。現役世代は移ぎに出ていて、災害が起きてもすぐには帰って来ない。実質的に地元を守るのはじいちゃん、ばあちゃん、かあちゃん。だから私は「うちやん防災」を提唱している。限られた人員、世代でも防災に関する知識と実行力を高めてまちを守るのだ。災害対応の実践力を高める手法はさまざまある。まずは人命救助。柱の下敷きになった人を何の道具もなしに引っ張り出そうとしても、難し

い。滑車の原理で物を持ち上げるチ
ーンブロック、チェーンソー、ワ
イヤロープの三つがあればかなり
の重物を動かせる。地域ごとに一
式そろえ、使えるように訓練してお
くと良い。大それたことを、と思っ
たらどうか。しかし大規模災害では一
度に数百軒、数千軒が被災する。消
防や自衛隊の到着を待っている手
遅れだ。その場にいる人間が助ける
しかないではないか。実際、阪神大
震災では発生直後、近隣住民が救助
の主力を担い、多くの命を救った。

安全情報も欠かせない。現状では
数人の自治会役員らが数百軒を回っ
て無事かどうか確認させるを得な
い。これを解消するのが「安否札」
だ。家人が避難時に玄関や門扉に掲
げれば、「この家は大丈夫」と分かる。
救出・避難や捜索の効率があがる。
例えば高齢者や障害者、妊産婦ら避
難が困難な人は、札の色を変える。

「避難が難しい。だが玄関先に出て
きている」とのサインになる。自力
で逃げるのが困難でも、玄関まで出
て札を掲げてくれれば、おんぶでも
リヤカーでもピックアップできる可
能性が高まる。ただ根本的な問題が
ある。どこにどんな災害弱者がいる
のか、自治体は原則、地域に情報提
供しない。個人情報とは言い、事
は命に関わる。最低限、隣近所には
伝えるなど現実的対応を求めたい。

除と隣り合わせだ。車だからこそ助
かる。このジレンマをどうするか。
地域別に緊急車両に準じた車を数台
決め、一筆書き的にまちを走って要
支援者だけを乗せるという策もあろ
う。能登のように幹線路が破断して
も、迂回できるのは未舗装の裏道ま
で知り尽くす地域住民であればこそ
だ。それでも、津波対策で「車で避
難しても良い」という伝え方は避け
るべきだ。原則徒歩とし車を禁じな
い限り、必ず殺到する。

ただ、あらゆる現場で一律に禁じ
るのは現実的ではない。地震・津波
からの避難は揺れ始めてからの一斉
スタートなので、車は渋滞する。対
して大雨など水害の場合は多くの場
合、段階的スタートが可能だ。災害
弱者や増水リスクが高い地域が先発
すれば、むしろ車移動の効率だけを
生かせる。ここでも、考えて備える
ことが大事だ。

何を持ち出す

原則徒歩で逃げるとして、迅速に
動くには身軽さが求められる。地震
発生から間を置かず津波が来る地域
ならなおさら、移動速度が生死を分
ける。だが、一般的な防災備品リス
トや持ち出し品リストを見ると、そ
の種類と量にがくんとする。例え
ば水だけをみても、1人1日3リットル
必要とされる。消防庁の非常用持出
品チェックシートの飲料水の項目に
は「最低3日分は用意しましょう」と
ある。水だけで9リットルになる計算だ。
屈強な若者ならともかく、他の物資
も詰めて、担いで走るのは難しい。
非常持ち出し品の「正解」とは。

清水上 いくつもの公的機関がリ
ストを公表しているが、大半は多く
の人に必要と思われる品を列記した
ものだと考えてほしい。参考にしつ
つ、アレンジするのが正しい使い方
だ。こうして個々に作る持ち出し品
リュックを私はマイバッグと呼ん
でいる。冬の夜就寝中に地震が起き
たとして、ベッド下のマイバッグを
開けるとまずライトがある。ガラス
の破片などがをしないよう履き
慣れた靴もほしい。他の中身は人そ
れぞれでいい。周りを照らしてコー
トやヘルメットを身に付け、バッグ
を背負えばすぐ逃げる事ができる。
身軽さが身の上だ。能登では断水が
長期化しているが、基本的には東日本
大震災以降、水や食料など最低限必
要な物資が届くのは、かなり早くな
った。逃げるスピードを犠牲にして
まで水などの重い物を完全に詰め込
む必要性は低下している。

荒屋敷 夏と冬で変わるだろう
が、水は基本的に500mlのペットボ
トルが何とかなる。持ち出しリュッ
クの総重量は7kgまでを目安とし、
肩に楽に引く掛けられる程度にす
る。水も食料もたくさんあるに越し
たことはない。でも、それ以上に大
事なのは避難所に備蓄が無く、救援
物資でも替えがきかない物。例えば
薬やコンタクトレンズ、つえなどだ。

デジタル準備品と呼んでいるが、
通帳やお薬手帳、マイナンバーなど
をスマートフォンで撮影しておくの
も有効。家族全員の写真も取ってお
こう。離れたなれたら時、氏名
や年齢、身体的特徴を挙げて簡単な
には見つからない。写真なら一発だ。



「あなた自身に必要な備えを」と促す荒屋敷武則副支部長

交流サイト(SNS)に上げれば、
大勢の目に触れる。

清水上 持ち出し品バッグは担い
で逃げる1次バッグと、翌日落ち着
いてから自宅に取りに戻る2次バッ
グの2種類用意したい。機動性を考
慮した1次バッグに対して、ゆっく
り持ち出せる2次バッグには重い物
やかさばる物を入れたら良い。大事
なのはリストの受け売りではなく、
あなた自身の優先順位を決めること
だ。発生直後を生き抜くため、自分
にとって必要な物は何か。それを全
て担いだとして、あなたの体力で十
分に逃げ切れるか。それが無理なら、
何を2次バッグに分けるのか。

荒屋敷 津波浸水エリアなら、自
宅に2次バッグを保管できない。家
ごと流される恐れがあるからだ。地
域であらかじめ高台に簡易物置を用
意するなどして、世帯別に2次バッ
グの中身をストックしておいても便
利だ。そこに投光器や暖を取る設備
なども保管しておくかどうか。地域
全体の創意工夫が求められるよ。

「あなたが自身に必要な備えを」と促す荒屋敷武則副支部長

取り組みだ。学説、定説はさまざま
あるが、本当に有効か、あなたの命
を守るのに役立つかどうかは誰も保
障してくれない。適切な備えは想定
される災害や季節、地域によって異
なる。それどころか、個人で千差
万別だ。定説、教訓に学びながらも、
安心せずさらに自分で考える。日本
人はカイゼンが得意だ。想像力を働
かせ、課題を洗い出し訓練を重ねれ
ばパーシジョンアップできる。次の災
害に向け、対応力を育もう。(談)

清水上 荒屋敷 防災は他でもな
いあなたや家族、地域を守るための

さがらず、重くもない上出来だ。夏
場はカイロを大きめビニール袋(雨
がつばにもなる)に、あめを塩分タ
ブレットに変えても良さそうだ。
作って満足ではなく、持ち続ける
ことが大事だ。ようかんは賞味期限
前に食べてローリングストックしま
われないよう気を付けたい。

冬場なので携帯カイロとマスク、
メモ・連絡用にペンとふせんも加え
た。消毒綿は、より多用途に使える
除菌ウェットティッシュに変えた。
ミニライトはボタン電池式ではな
く、汎用性が高い単4型を選択。他
の電源にも転用できるはず。ようか
んは好きだが、それだけだと寂しい
ので、あめも入れる。いろいろ加え
た分、圧縮タオルと袋類は断念した。
薬、現金以外は全て100円ショップで
調達できた。写真右下。うまく詰め
て、総重量約300gまで同左下。か

